

特別レポート

看取って葬式もする「疑似」コミュニティ

同和園(京都市)と金井原苑(川崎市)の取り組み

医療福祉ジャーナリスト・尾崎雄

希望すれば施設内で看取って葬式もする。そんな特別養護老人ホームがある。それは、私たちが見失ってしまった心のふるさとを回復する試みだ。看取りと葬儀は家族と近隣社会の絆が緩む時代ならではの機能がである。

「死」は、亡くなった人からの贈り物

京都市伏見区の特別養護老人ホーム同和園は、小野小町ゆかりの化粧井戸を境内にもつ名刹、随心院から歩いて数分。ある日、同ホームで亡くなった女性の施設内葬儀に参列した。ホール正面の大きな仏壇の前には柩が安置され、袈裟衣を着た僧侶3人が厳かに読経を始めた。参列者は子供も含めて10数人。花飾りは一対と質素な祭壇に、遺族、ホーム入居者、そして看護師、介護スタッフら施設職が次々と合掌し、焼香する。

仕事の合間を縫って来たジャーナリスト姿の介護職員、車いすで介助されながらのホーム入居者の女性、式が終わるまで僧侶の読経に唱和する男性入居者……。およそ1時間の葬儀を終えると玄関から

出棺し、お骨になっても身寄りのない人は園内の納骨堂(写真1)に葬られる。こうした園内葬儀は「多い月には5件、ならせば3件」(橋本武也園長)もある。

人生の最期の最期まで親身に寄り添った医療・介護・生活相談スタッフは、肉親よりも身近なおくりびと。その最後のもてなしを受けて旅立つことができるなら、幸せなはず。遺族も似た思いで、昨年、母親の葬儀を頼んだある遺族は同和園の納骨堂に分骨した。

同和園は、大正10年、超宗派の京都仏教護国団が「京都養老院」を開設したのが始まり。昭和27年に社会福祉法人となり、現在は特別養護老人ホーム(定員288人)を中核とする京都最大の高齢者総合施設だ。僧侶の資格を持つ

施設管理者や生活相談員が4人おり、ふだんは橋本園長(常務理事)がみずから葬儀の導師を務める。仏教的な背景を持つだけに、園内での看取りと葬儀は

写真1 同和園の敷地内にある納骨堂。身寄りのない入所者が亡くなるとここに葬る



「当然のこと」(橋本園長)だとしながらも寺院ではないのでお布施はいただかない。

むしろ、「死」は、亡くなった人から残された人々への「贈り物」だ。人の死を直視することによって死生観を養い、故人にしてきたケアを振り返って「反省点があれば、改善して次のケアにいかすことができる」からだ。付属診療所の所長を務める「大往生したけりや医療とかかわるな」を書いた中村仁一医師によると、老人が最期に果たす大きな役割は「自然な死を残された者に見せること」である。特養が「終の棲み処」だとされるな

ら、宗教の有無を問わず、そこで看取られ、その仲間たち見送ってもらうことは自然な姿である。

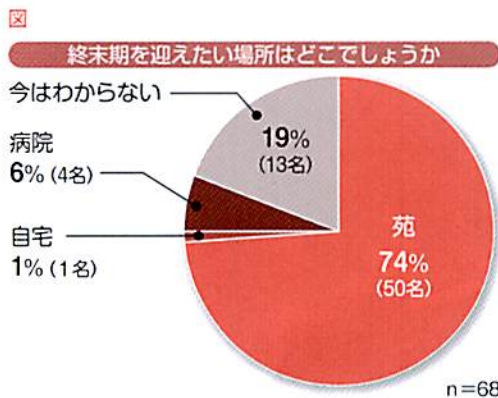
人は共同体の中で生まれ死んでいった

川崎市の特養、金井原苑が7年前から提供している「お別れ会」は、それに当たる(写真2)。入居者のご遺体は霊安室で看護師が遺族とともにエンゼルケアを施したあと、「お別れ会」を行う。特養本館の玄関ホールに祭壇を設け、深くかわった職員が故人の経歴や生前のエピソードを紹介する。続いて入居者、施設スタッフが献花をし、最後に遺族が感

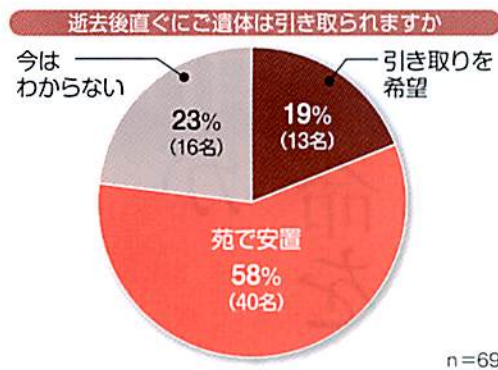
写真2 金井原苑でのお別れ会



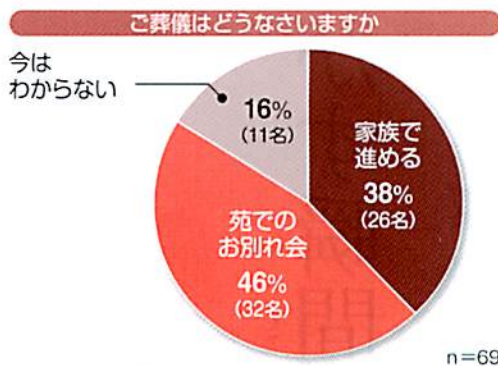
謝の言葉を述べる。
この間およそ1時間、遺族も入居者も施設スタッフも一緒に涙を流す。入居者は「よく頑張ったね」と悼みを分かち合い、職員らは貰い泣きする。このように故人にかかわった者たちがその場所で一堂に会して、仲間の「死」を分かち合う様子を依田明子苑長は「かつての長屋の葬式」にたとえる。
むろん、お布施は不要で、費用は柩、祭壇、霊柩車、火葬料など一式およそ23万円から28万円。現代の葬祭事情にうれしい角田山妙光寺(新潟市の小川英爾住職によると)「かつて、人は共同体の中で生まれ、そこで死んでいった。だとすれば、葬儀を行う特養は「疑似コミュニティ」ではないか。ホスピス



医の山崎章郎医師もそう考える。同和園と金井原苑の共通点は、看取り加算ができる前から看取りケアを充実してきたこと。「もともと教育と施療と看取りは寺院の使命だった(小川住職)だけに、同和園は「看取りを大正時代から行ってきた」。24時間の看護体制を敷き、付属診療所の中村医師は知らせを受ければ早朝・深夜・休日を問わず自宅から駆けつける。園内看取り率は23年度は68%に達している(2月末現在)。
金井原苑も看取りケアと「お別れ会を車の両輪」と同時にスタートした。看取り指針の「死後のケア」に「家族支援と葬儀全般の相談」を、「死後の援助」に「葬儀の連絡、苑でのお別れ会の調整、相談



等」を明記し、入居者との間で「終末期と葬儀の確認書」を取り交わしている。
良い看取りができれば遺族が満足して施設への信頼感を高め、「葬儀もここで」と期待される。金井原苑の調査(平成20年)によれば、入居者の74%が同苑での終末期ケアを、46%が苑内の葬儀を望んでいる(図)。「お別れ会」をしたあとに世間並みの葬儀をするケースが多いが、最近では「お別れ会」のみの遺族が増えている。
こうしたニーズに応えるには、看護師や生活相談員らの役割を捉え直し、嘱託医ら医療との緻密な連携が求められる。付属診療所がなく看護師も昼間勤務の金井原苑は、そのぶん看護師と生活相



談員の負担が重く、管理コストもかさむ。だが、それは、死と向き合って死生観を養うための「研修コスト」と割り切っている(依田苑長)そうだ。
高齢者施設での看取りは死亡数全体の3%程度にすぎないが、今後は家族の解体と施設入居者の高齢化が一段と進むため小規模な家族葬が増えて、入居から墓場までの「丸ごとケア」が望まれるようになる。特養が、そうした社会の変化を先取りし、「疑似コミュニティ」から「真のコミュニティ」に脱皮する使命を果たすことができれば、施設介護の新たな可能性を拓き、施設の復権にもつながっていくはずだ。

「終末期における看取りの確認書」アンケート結果より(金井原苑、平成20年3月)